

# ICAN Monthly Report



生きるために、今日も危険を承知で、車の乗客に物乞いをする子どもたち。

## 一刻も早く、「子どもの家」を作りたい。

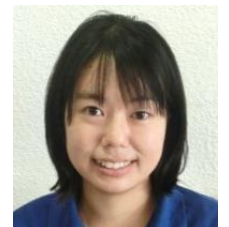
<路上の子どもたちの事業：担当職員からの現地レポート>

マニラ首都圏の路上の子どもたちの事業を担当している岩下です。親からの虐待や貧困などが原因で、路上で生きることを余儀なくされた子どもたちが、周囲からの暴力や薬物、交通事故など、様々な危険が渦巻く路上から抜け出せるよう、私たちは日々活動しています。

私たちの活動に参加する子どもの一人、ミカエラ（現在 15 歳）は、母親の育児放棄のため、幼い頃から路上で生きてきました。そんなミカエラが路上で出会い、いつも行動を共にしてきた親友が、同じ歳のジンキです。9 月 24 日の早朝 4 時、このジンキが、他の子どもたちの目の前で車のひき逃げに遭い、亡くなりました。事故直後、ミカエラはただ呆然としていましたが、スタッフが声をかけると「ジンキの顔の半分が潰れていた、足がなくなっていた」「引かれた時、私があげた T シャツを着ていた」等と、目にした悲惨な光景を、身振り手振りを加えながら取り乱して何度も話していました。

ミカエラは、ひとしきり事故の話をして落ち着いた後、静かに呟きました。「路上から出て、施設に入りたい」。幼い頃から路上で生きてきたミカエラにとって、路上は、彼女の「すべて」と言っても過言ではありません。それでも、親友ジンキの死に向き合い、彼の分も生きていくためには、危険な路上から出なければいけない。彼女はそう考え、大きな決断を下しました。

私たちは、現在、ミカエラのような子どもたちが安心して暮らせる保護施設「子どもの家」を、マニラ近郊で建設しています。マニラの保護施設の数は不足しており、路上で命を脅かされている子どもたちが入所を決断しても、長くて半年以上、空きが出るのを待たなければならないからです。この「子どもの家」の土地はすでに購入できたのですが、建設と運営には、あと 500 万円足りません。一刻も早く、この「子どもの家」を完成させるために、どうかアイキャンの活動に参加してください。

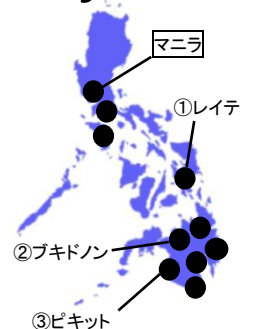


ICAN マニラ事務所  
岩下奈未 (いわしたなみ)

～プロフィール～

1988 年生まれ。九州大学 21 世紀プログラム卒業。総合化学メーカー海外営業、ICAN 紛争地の子どもたちの事業プロジェクトマネージャー補佐を経て、現担当。

## Project Site



※●は ICAN 活動地  
※番号は裏面に対応

**マンスリーパートナーになっていただくことで、ミカエラをはじめ、多くの子どもたちの生活を向上させることができます。**

月々 1,000 円（一日約 30 円）から始められるご寄付の制度です。年に一回、子どもたちからプレゼントが届きます。

**マニラの路上の「子どもの家」指定寄付で、子どもたちの命を救ってください。**

建設中の「子どもの家」の経費（建設費・運営費）のみに使用させていただきます。

上記 2 つの寄付に関して、詳しくは、ホームページ (<http://www.ican.or.jp/>) をご覧いただくか、メール ([info@ican.or.jp](mailto:info@ican.or.jp))、またはお電話 (052-253-7299) にて、ICAN 日本事務局までお問い合わせをお願いします。

**アイキャンは、随時、事業地から報告をお届けしています。** <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

## ① 災害被災地の子どもたち（レイテ）



### ココナッツに代わる収入源を

長期的な生計の立て直しが始まっています。この日は、被災でココナッツなどの収入源を失った住民たちに対し、キャベツ、オクラ、芋などの苗を提供し、栽培の活動を行いました。カロリーナさん（42歳）は「もっとたくさん植えていこう」と、収入源の拡大に意欲を見せていました。（9月26日）

## ② 先住民の子どもたち（ブキドノン）



### 薬草を育てて健康を守ろう

山奥に住むこの村の人々は、現金収入がほとんどないため、病気になっても薬を手に入れることは困難でした。そこで、薬草の知識に関する研修と、薬草の苗を植える活動を行いました。サワンアイ首長（58歳）は「村の皆の健康のためにも、この苗を大切に育てたい」と語りました。（9月6日）

## ③ 紛争地の子どもたち（ピキット）



### 合意を得て進めていくことが大切

ミンダナオ紛争地の高校生24名に、平和的に物事を進めるプロセスを学んでもらうため、工作のグループワークを行いました。いかにして作品の完成度を高めるか、様々な意見が対立します。サミアー君（18歳）は「皆の意見を整理し、合意を得て進めることが大切」と感想を述べました。（9月4～7日）

## 今月の ICAN を増やす活動

### 街頭募金/MY アイキャン事業

9月6日/名古屋

#### 街の人を動かす、若者の声

聖霊中学高等学校の29名が、レイテ島被災地への街頭募金を行いました。残暑厳しい中、声を張り上げて懸命に現地の状況を伝え、96名の方からの募金が集まりました。初めて参加したある中学1年生は「最初はなかなか寄付をしてもらえず、お金を集める大変さが分かった」と感想を述べました。



### 出張講演/NGO 相談員事業

9月6日/新潟

#### 国際理解教育の担い手へ

新潟県で開催された、国際理解教育指導者育成を目的とした「国際教育研究会」において、教員等21名を対象に、NGO活動について海外事業部の吉田が講演をしました。参加者からは、「自分の学校の子どもたちにもぜひ伝えたい。講演に来てもらえないか。」などの声が上がりました。



## 今月の Topic



### 子どもたちの心を開いたダンス交流

9月13日

パヤタスごみ処分場周辺地域の子どもたちが、TV番組「外務省 presents『僕らが世界にできること』」の取材で日本から訪れた「TEMPURA KIDZ」と交流しました。お互いにダンスを披露しあった後、TEMPURA KIDZのメンバーが考えてきた振付を皆で覚え、最後は一緒に踊りました。言葉が通じなくても、ダンスを通して短時間で打ち解け、別れの時には涙する子どももいました。この番組は、以下のサイトで現在も視聴できます。ぜひご覧ください。

Youtube ⇒ 検索ワード「情報バラエティ番組『僕らが世界にできること』」

## 今月の ICAN 名人

◎ 伊東さん、素敵なメッセージをありがとうございました！

### マンスリーパートナー 伊東沙保さん

#### 「スタディツアーで改めて考えた、私にできること」

インタビュー:9月23日

私がフィリピンに関心を持つようになったきっかけは、勤務先の乳児院にフィリピンの子どもがいたことです。フィリピンの子どもに関わる団体を色々調べる中でアイキャンを知り、イベントでのフェアトレード商品販売や日本事務局の事務作業のお手伝いを何度かさせていただきました。そして今年の9月、念願のスタディツアーに参加しました。

ツアーでは、ごみ処分場周辺に住む子どもたちやその家族、路上の子どもたちと直接ふれ合い、困難な状況でも、家族を愛し、たくましく生きている子どもたちの姿から、家族の大切さ、生きる力の素晴らしさを感じました。同時に、彼らが置かれた環境を目の当たりにし、生の声を聞いて、今の自分にできることは何だろうかと思いをめぐらされました。

帰国後は、忙しくてボランティアの時間がなかなか取れませんが、そんな自分にもできる「マンスリーパートナー」の寄付を続けています。フィリピンの子どもたちが笑顔を忘れず、自分の夢に向かって頑張っていけるよう、これからも応援しています。

